



山中に穴掘り暮らした男の二〇〇日 (二)

— 長尾の峰といふ處 —

前回のおさらい

大正・昭和期の謎の絵巻書『武蔵國御嶽山村井弦齋先生の居穴』。自然に開まれ自然を食す『天然生活』を望んだベストセラー作家・村井弦齋は、御師を介して御岳山中にテントを張り、のちに『巽六式六居』をつくり暮らしたという。

時は大正九年(一九二〇)。当時では老人の域に差し掛かるうという五十七歳の村井弦齋は、二〇日もの間、御岳山のごとで暮らしたのか。そこは取材陣や見物人に「こんな所」と気味悪がられる、草木繁り、獣のみならず天狗さえお出ましになりそうな場所。弦齋の世話役をつとめた西須崎坊の御師・須崎宮治氏はこう語る。

「平生誰も行かないから、荆棘路を塞ぎ、兎や狐狸の棲むに任せてあります。風景は関東の平野を眺下して最も佳絶であり、獨立なれば塵俗の氣も無く、人の来る事も無く、これならば全く世間に遠ざかつて獨り天然生活を肆まにする事が能きませう」

案内された弦齋が感嘆し、生活の舞台に是非と即決したその地の名は、『長尾の峰といふ處』

長尾の峰。現名称は長尾平。当社より石段を下り徒歩十分ほどの、東向きに突き出た尾根。中腹は開けた平地で、緊急用のヘリポートを兼ねている。突端は展望台となっており、遮るものなく関東一円を眺めることができる。春にはカタクリや桜が咲く、山の民もふらりと散歩に行く憩いの場。にわか信じがたいが、当時はここが『荆棘塞ぐ獣棲む地』だったのだという。

生活と連載記事が長尾平の評価を上げ、野遊場・展望台として開かれる一要因となったのかもしれない。というのは言い過ぎだろう。

さて、実は、この緑地保護・整備を推進するコラムや論評などにも、弦齋が用いた『天然生活』という言葉を使用するものがある。欧米の、家庭に隣接して緑を育み愛でる庭園(ガーデン)や、公共の憩いの場としての公園パーク)という考え方に触れ、自然豊かな都市のあり方、余裕ある理想的な暮らしを『天然生活』と銘打っている。当時は、動物の生活、『野生』をを表すこの言葉だが、この時期から指し示す意味が変化してきているようだ。

では、弦齋が目指した『天然生活』とは何だったのか。これは言葉も意味もそのまま、大正六年(一九一七)に翻訳出版されたドイツの医学者アドルフ・ユーストの『天然生活法』に端を発する。弦齋が編集長を務める『婦人世界』誌でも取り上げられたこの本は、衣食住すべて、その地・その時の自然の流れにあるもの成るものをそのまま、できる限り加工せず受け入れることを良しとする心身健康法であり、弦齋の語りとはほぼ一致する。加えて食に限れば、栄養学が進展し、高カロリー・高蛋白を求めめる食生活が決して正しいものではないとにわかに語られはじめたことも、自然食を後押ししただろう。

弦齋はこれらの論説や最新の研究を取り入れ、自身の断食や木食の研究・体験と照合し、日本の地で自身が行うために落とし込んだ、いわば弦齋式天然生活法を実験するための舞台としてはるるる御岳山へとやって来たのだ。

弦齋の山中生活記には、今では失われてしまった様々な山の様子も記録されている。山へ分け入りながら採れる季節の果実や山の幸。たとえば九月下旬、採りたてならばいくらでも食べられるという至高のアケビ。居て当然というくらいに描かれるヤマドリやウサギ。山の民たちが雨も厭わずにこそぞって終日広い集める栗。栗については、神社付属地たるこの地には多数残されているが、伐り出して木材にばかり使っているとつか食物欠乏に陥るぞ、と警鐘さえ鳴らしている。残念ながら、現在のこの山に多くは残されていない。また、九月二十九日、騎馬にて行われる流籠馬神事。決まって雨が降ることから「雨祭り」とも呼ばれていたという。当の弦齋は、勢いを増す大雨のなか消えずに燃え続ける篝火にばかり注目していたようだが。加えて十二月上旬、

それもそのはず。御岳山が観光整備されたのは弦齋が去ったあとのこと。関東大震災からの復興事業を終えた昭和七年(一九三二)、東京府に「東京緑地計画協議会」が発足。都市部に緑ある街を計画する傍ら、優れた景観や自然を保護する景園地を指定。昭和十年(一九三五)より、特に利用者の多かった伊豆大島・高尾・御嶽の三地区に注力して自然公園の整備をはじめ。御嶽景園地の概要はこのとおり。

「御嶽神社と、其の周囲の原始的境内林よりなる神域を中心として、各々約二軒の地点にある山嶺、即ち東の目ノ出山、西の鍋割山、南の高岩山及北の大塚山で、何れも標高九〇〇米以上の四山を展望場に選定し、此等の間に存在する富士峯及長尾平を野遊場に、又御嶽山古来よりの名所であるところの七代瀧・天狗岩及綾瀧の一带を遊歩場とし、その一部に自然風大岩石園を設定し、以此等各主要施設地を相連絡する道路、即ち慰安・休養並教化に資する逍遙路を開設」という。

また、長尾平がなる「野遊場」とは、「苑地の重要な要素をなす施設で、大衆の離合集散、休息、学童の単なる「あそび場」等、広範囲に使用される園地。設備としては、広い空地(芝地)に野外卓、水栓、休息所、便所および適度の修景植栽を設ける程度である」とのこと。岩石園、つまりロックガーデンをはじめとする現在の主要な周遊コース、ハイキングコースがほぼこの時に形づくられ、長尾平もほぼそのまま。三七一〇ヘクタールにおよぶ整備と時を同じくして御岳登山鉄道も旅客営業を開始。豊かな自然と歴史がひろく知られ、のちに「御嶽山」を冠する観光地へと繋がっていく。

ただ、おそらくこの整備によって弦齋の穴居は跡形もなく失われた。弦齋の穴居を写した絵巻書や写真は整備以前の長尾平を写した貴重な資料のだが、残念ながらほぼ建物しか写っておらず、周囲の様子はおろか、どの地点に建っていたのかもわからない。ただ、穴居をつくるための社有地工事にあたり須崎宮治氏が神社へ提出した願文は『長尾峯頭拝借願』、それを受けた神社の議事録には「長尾峯先」と記されているほか、弦齋も穴居について「天幕(テント)のあった峯の前の懸崖」、「正面は東向き」、「朝は日光が奥の壁まで照らし」と表現しているため、突端に位置したのだろう。現在も突端まで行けば、弦齋が描いた「眼下にあがる火花」、「沖の舟を数える」などの景色を体感することができる。ともすると、整備の十年以上前に行われた穴居

二尺ほどの積雪のうちに奥の院付近で発見したというオオカミの足跡。弦齋のうちに知り合った奥多摩の獵師に聞いてみたところ、オオカミのものも確認できた、とのこと。二ホンオオカミの生息記録は明治三十八年(一九〇五)、奈良のものが最後とされるが、それから十年以上経ったあとも、このあたりにはまだ暮らしていたのかもしれない。

弦齋の山中天然生活を、「ネタに行き詰まって話題づくりに突飛なことをしている」と揶揄する記事も出たらしいが、まあ、そういう側面もあったのかもかもしれない。ただ、弦齋について調べていけばいくほど、あながち突飛でもなく、むしろ筋が通っているのかもしれない、と思いたくなるのである。

第三回、「二〇〇年前の現代人」へつづく。(文：権禰宜服部朋也)

【主要参考文献】

- 里見比佐子「食道楽」の人、村井弦齋(岩波書店、平成六年)
- 東京都公園協会(八雲緑地関係業務用集(その二)「都市公園」第九号、昭和三十三年)
- 山崎典一「御嶽景園地施設に就て」『造園雑誌』第六卷 第一號(日本造園学会、昭和三年)
- 東京府土木部土木庶務課編『東京緑地計画要覧』(昭和三年)
- 村井弦齋「武御嶽山に於ける私の山中生活」『婦人世界』第十卷 第一號(第六號、東業之日本社、大正七年)
- 村井弦齋「山中生活の経験より得たる登山の心得」『婦人世界』第十六卷 第七號(東業之日本社、大正十年)

<御嶽山周辺と世情>

明治6年 (1873)	講と御師により「綾瀧の滝」周辺を開拓整備する
大正3年 (1914)	主な交通機関は乗合馬車
大正4年 (1915)	第一次世界大戦(～大正8年) この頃から稀に自動車が行き通るようになる
大正5年 (1916)	地域一体に電灯が敷設される(御岳山を除く)
大正7年 (1918)	夏に米騒動、秋からスペイン風邪が大流行する
大正9年 1月 (1920)	青梅鉄道 青梅駅～二俣尾駅まで開通
大正11年 8月14日 (1922)	村井弦齋、御岳山中天然生活開始(～翌3月23日) 二俣尾駅～御嶽(字中野)間の定期自動車が開業
大正12年 4月25日 (1923)	青梅鉄道電化 立川～二俣尾間を28分短縮
昭和4年 9月1日 (1929)	関東大震災 この地域に大した被害はなかった
昭和10年 1月1日 (1935)	青梅電鉄 二俣尾駅～御嶽駅開通
昭和14年 9月1日 (1939)	第二次世界大戦(～昭和20年8月)
昭和19年 2月1日 (1944)	御嶽登山鉄道 戦争による金属供出のため営業休止
昭和25年 7月10日 (1950)	御嶽周辺に川井玉堂や川井英治、朝倉文夫らが疎開
昭和26年 6月29日 (1951)	「秩父多摩国立公園」指定
平成12年 3月6日 (2000)	御嶽登山鉄道 運輸営業再開
平成12年 8月10日 (2000)	岩石園周辺が東京都名勝「奥御嶽景園地」に指定
	「秩父多摩甲斐国立公園」に名称変更